

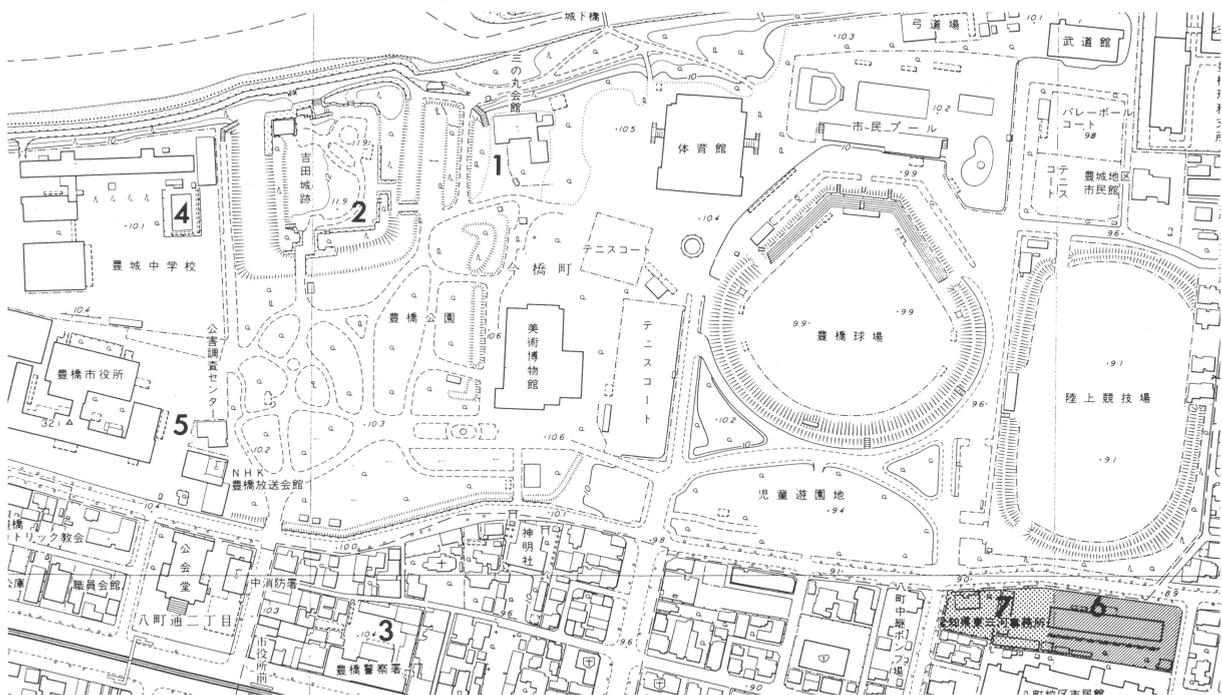
吉田城遺跡

調査の経緯 吉田城遺跡は、豊橋市八町通に所在し、豊川の左岸、朝倉川と合流する段丘上に位置する。本センターでは愛知県東三河総合庁舎建設に伴い、愛知県東三河事務所跡地を昨年度はA区（平成5年1月～3月・2,600㎡、第1図の6地点）と今年度はB区（4月～7月・2,700㎡、第1図の7地点）の2つに区分して発掘調査を実施した。

吉田城関連の発掘調査は、これまでに豊橋市教育委員会によって行われてきた。古くは昭和59年に三の丸地区（第1図、1地点）の調査が行われ、吉田城関係の遺構をはじめとする各時代の遺構が検出され、江戸時代の馬場跡や米蔵跡が確認されている。平成元年には本丸地区（第1図、2地点）が調査され、御殿跡と思われる遺構等が検出された。平成3年には二の丸地区（第1図、4地点）において、今橋城の時期の濠（幅8m、深さ4.5m）や大型の土坑（20m×13m）、平成5年には三の丸地区（第1図、5地点）で、今橋城や吉田城の溝や堀、歩兵第十八連隊関係の遺構が確認されている。

本センターでは、平成2年に豊橋警察署地点（第1図、3地点）を発掘調査しており、武家屋敷地区（家老西村孫次右衛門と東隣りの西村国治の屋敷地）の調査を行った。近世の遺構や16世紀の遺構が検出されており、中世吉田城（今橋城）の構造を考える上での好資料となった。昨年調査区（第1図、6地点）では、外堀と4軒の武家屋敷地の他、中世（13世紀代）の遺構も確認されている。

（水谷寛明）



第1図 調査区位置図 (1/5000)

SD 139 愛知県埋蔵文化財センター 年報 1994.3
SD 142

SD 146

SD 164

SD 131

SD 002

SD 133

SD 157

P 756

P 221

P 603

P 704

P 601

P 600

SK 113

SK 118

SK 115

SK 114

SK 046

SK 107

SK 032

P 721

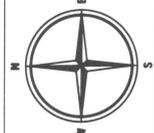
SD 145

Y=21450

SD 001

SE 002

Y=21440



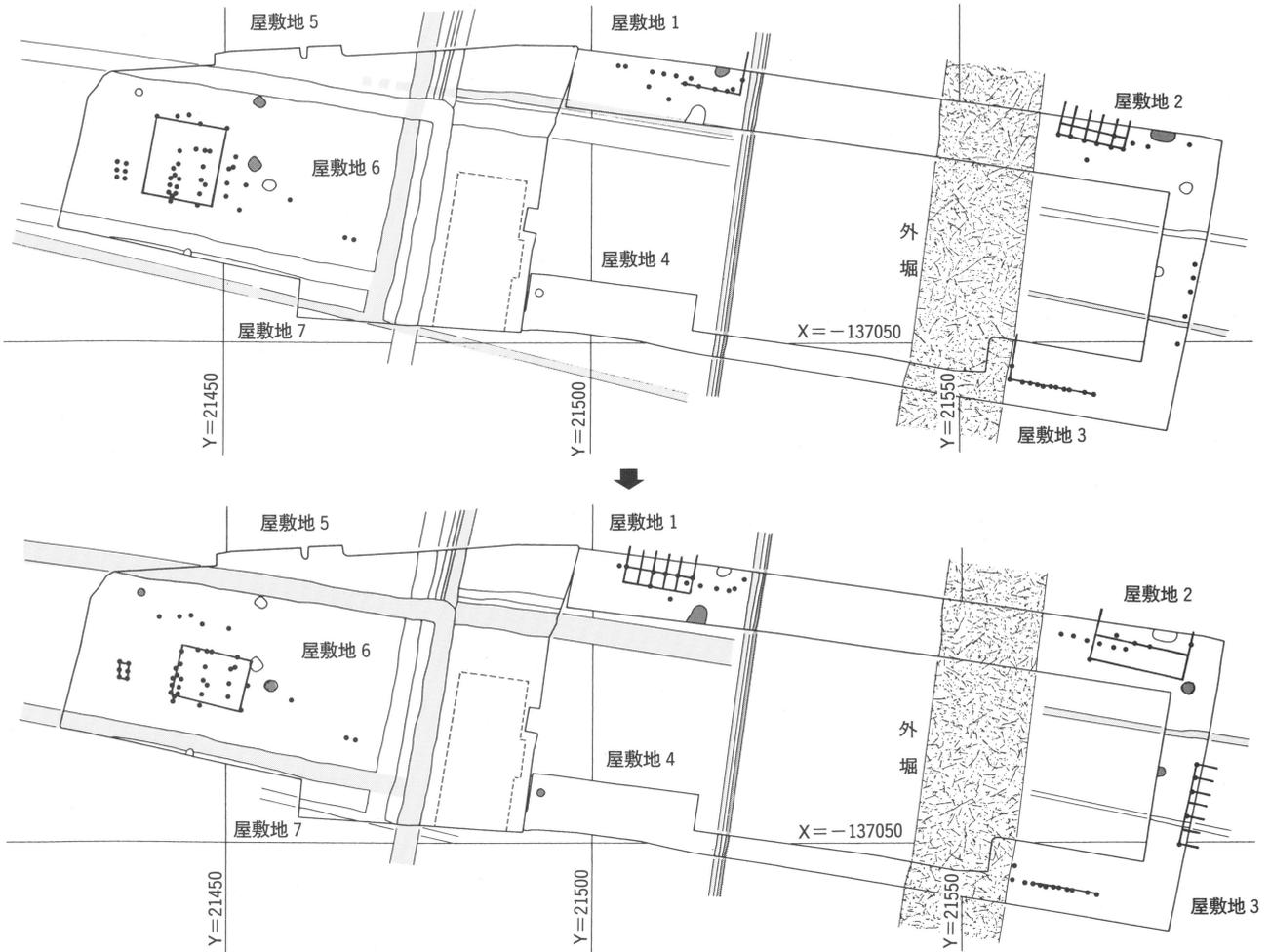
- 区画溝 (屋敷境)
- 暗渠
- 井戸
- 瓦溜
- 廃棄工杭
- 埋め墓
- 集石 (礎石)

SK 036

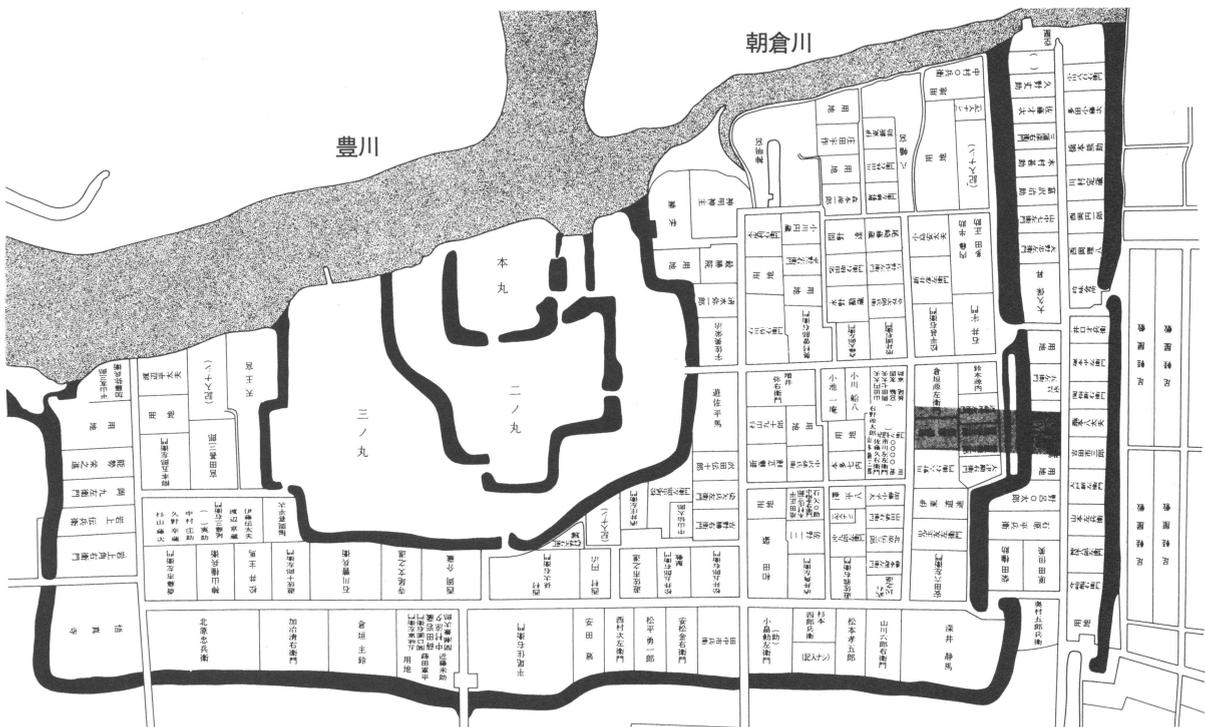
SK 002

SK 003

第2図 主要遺構配置図 (1/250)



第3図 主要遺構変遷図



第4図 「吉田藩士屋敷図」(豊橋市美術館所蔵)

調査の概要 昨年度の調査区(面積2,600㎡)も含めて、旧愛知県東三河事務所地点全体(総面積5,300㎡)をまとめておきたい。遺構は、大きく古代・中世・近世前期(16世紀末～18世紀後葉)・近世後期(18世紀末～19世紀中葉)・近代(歩兵第十八連隊関連)の5時期に分けることができる。出土遺物は、コンテナ約400箱に及び、その大部分を近世陶磁器類・瓦類が占めている。

古代 古代の遺構としては、径約60cm、深さ約80cm程の柱穴列と土坑数基を確認している。この柱穴列はこれ以外には確認されておらず、柵列と想定することができる。時期は、出土した須恵器などから8世紀後葉と考えられる。

中世 中世の遺構としては、区画溝や井戸、竪穴住居跡、集席遺構などが確認されている。しかし、集落の構造を捉えられるほど、良好には残存していなかった。時期としては、出土した渥美産の山茶碗などから13世紀代が想定される。

近世 本遺跡の中心となる近世の主な遺構としては、外堀と7軒の武家屋敷地が検出されている。それぞれの屋敷地では、屋敷境の溝や排水溝、井戸、建物の礎石や柱穴、廃棄土坑などが確認されてはいるが、6軒分は周辺部分しか検出されておらず、全体を想定することは困難である。しかし、屋敷地6とした部分はほぼ1軒分を含んでおり、本遺跡の武家屋敷の構造を考える上で重要な地点であると思われる。各屋敷地の居住者を「吉田藩士屋敷図」(第4図)や嘉永7年(1854)・安政6年(1859)の「吉田藩士分限帳」『豊橋市史 第6巻』から割り出してみると、以下の表のようにまとめることができる。

屋敷地の居住者

	役 職	収 入	居 住 者 名	屋敷地面積
屋敷地1	玄関番	35俵	近藤増右衛門	約480坪
屋敷地2	城 番	40俵	草野九兵衛	約305坪
屋敷地3	玄関番	5石 2人扶持	徳島小左衛門	約390坪 用地含む
屋敷地4	武具方	40俵	田沼小弥太 (替三郎か)	合わせて 約459坪
	大納戸	60石	若原源之助 (源三郎か)	
屋敷地5	用 人	230石	倉垣源左衛門	約900坪
屋敷地6	—	—	佐野恭吾	約410坪
屋敷地7	馬 廻	70石	川野六右衛門	約460坪

出土した瀬戸・美濃産や肥前産の陶磁器類などから、16世紀末から18世紀後葉(前期)と18世紀末～19世紀中葉(後期)の2時期が想定され、遺構の方からも18世紀後葉に屋敷替えが行われているように考えられる(第3図)。詳しい検討は、来年度作成する報告書に委ねることとしたい。また、創建時の時期の遺構も確認されており、吉田城以前の状況も窺うことができる。

廃藩後の明治時代に建設された歩兵第十八連隊に関するものと思われる煉瓦建物の基礎と暗渠が確認されている。この暗渠がやや問題で、後期の屋敷地の区画溝を再利用しているのではないかと考えられ、現在出土遺物の整理を進めているところである。(小嶋廣也)